

〈論文〉

# メランヒトン『弁証法』における「自然の光」 —教育と学習の根本原理—

菱刈 晃夫

キーワード：言語（言葉）、自然の光、状態（質）、習慣、素質

はじめに

メランヒトン（Philipp Melanchthon, 1497-1560）において言語すなわち言葉とは、理性をもつ人間がより正しく適切な思考活動を行うことを可能にする基本的ツールである<sup>(1)</sup>。なかでもそうした言語の基礎に関わる自由学芸の一つである弁証法あるいは論理学は、文法や修辞学と共に<sup>(2)</sup>、メランヒトンが生涯にわたって労力を注ぎ、取り組み続けたジャンルである。

さまざまな分野で膨大な数のテキスト（教科書）を残し、後世にも多大な影響を与えたメランヒトンは、弁証法についてもその最初の入門的テキストを1520年に記している<sup>(3)</sup>。1527年までの間に少なくとも12刷を重ねたとされる、この *Compendiaria dialectices ratio* に始まり、1528年には *Dialectices Philippi Melanthonis libri quatuor ab auctore* が1545年までの間に少なくとも21回にわたって改版され、そしてここで取り上げる弁証法についての名著 *Erotemata Dialectices* は1547年の初版以来、16世紀プロテスタント圏ドイツでは、論理学における主要著作とされ、いずれも多くの学生たちに学ばれ続けてきた<sup>(4)</sup>。

本稿では、弁証法に関して大きく三つ見いだされるテキスト群の中から、とくに最後の『弁証法の問題』に注目する。そこで「自然の光」（*lumen naturae*）に関係するテキストを抽出することで、人間の思考および学習の根本的な原理をメランヒトンがどのように捉えたいのか、浮き彫りにしたい。

そこで注意しなければならないのは、メランヒトンの他の著作と同様、この『弁証法の問題』も多くの改版を重ねていて、そのたびに内容にもさまざまな彫琢が施されている点である。またメランヒトン以外の編集者による見解も付加されていることもある。全集 CR13, 507-752. には決定版とされる、メランヒトンの死後1580年にライプツィヒで印刷されたものが収録されているが、2021年に出版された英訳本には<sup>(5)</sup>、初版である1547年版等との多数の異同箇所も含められていて、メランヒトンの思想変遷をたどるのにも絶好の資料となっている。よって以下これを手掛かりとして参照しつつ、メランヒトンの原典資料に還りながら、「自然の光」について明確にしてゆきたい。あわせてメランヒトンが人間の思考と教育および学習の原理として何を根底に置いているのかも、明瞭となるであろう。

## 1 節 弁証法とは

この著作は四部に分かれていて、各節はタイトルにあるギリシア語 ἐρωτήματα の通り、「問い」（問題）に対する「答え」の形式をとっている。まさに冒頭の問いが、*Quid est Dialectices?* 弁証法とは何か、である。それにメランヒトンは、こう答える。

弁証法とは、正しく、秩序に従い、明確に教える（教えることの）学芸あるいは道（方法）である。それは正しく定義し（区切り）、区別し、真の根拠を結び合わせ、まずい結合あるいは間違いをほぐしたり退けたりすることによってなされる。

*Dialectica es ars seu via, recte, ordine, et perspicue docendi, quod fit recte definiendo, dividendo, argumenta vera connectendo, et male cohaerentia seu falsa retexendo et refutando*<sup>(6)</sup> .

弁証法とは教えること (docendi) の学芸 (ars) もしくは道や方法 (via) であるが、それはまず言語によってなされる。しかもそれは正しく秩序に従った明確な言語の組み合わせ、つまり言説によって行われなければならない。言語に関する知識は、まずは人間を人間たらしめている理性による思考のための基本的ツールとなるが、果たしてそれが可能となるのはなぜか。その原理をメランヒトンは人間の生まれつきの資質と能力に見いだす。弁証法、そして後に論理学の特徴と義務は、まさに正しく秩序に従って明確に教えること (recte, ordine, et perspicue docere) であるが、それが可能であるのはなぜか。

というのも人間はとくに神の認識のために、徳を知り実践するために、そして自然を考察するためにつくられているからであり、こうした重要な事柄について人間に教えることが人類にとって第一に必要であることは、明らかである。

Cum homines praecipua conditi sint ad agnitionem Dei, ad intellectum et officia virtutum, et ad considerationem naturae, ad his tantis rebus docere homines, praecipuum generis humani opus esse manifestum est <sup>(7)</sup> .

このように神を知り、あわせて人間にとっての美德を知って実践に移し、なおかつ神がつくった自然—ここに人間も含まれる—を考察するために人間はあり、さらにこれらの知識を人々、とくに若者たちに教えていくこと、すなわち彼らの教育が人間にとっての課題であり義務であることを、メランヒトンはいろいろな場所で繰り返し述べているが、そうした知識や知のための原理や根拠 (クリテリア) もまた人間には元より埋め込まれているとするのであった。

神は数の知識を理解するために自然本性に〔そうした知識を〕植えつけたのであり、こうして物事を区別するようになる。

Deus indidit naturae intelligenti noticias numerorum, ut res discernat <sup>(8)</sup> .

人間の教育に必要な資質や能力としての学習原理は、すでに教育が可能であるように、その人の自然本性に内蔵されている、というのがメランヒトンの変わらない基本見解である。人間にとってもっとも重要な活動、つまり思考という知的活動は、「自然の光に始まりを得る」(a naturali luce initium sumunt) <sup>(9)</sup> もしくは「自然の光に根拠もつ」のである。よって繰り返しになるが、「自然の光」とはメランヒトンにとって教育と同時に、学習の根本的な原理にも他ならない。とくに道徳については、自然法の観念を伴ったキケローを引用し、弁証法的つまり論理的として (cum Dialectico)、こう記している。

書かれたのでなくて自然と生まれた法律というものがある—我々はこれを学んだり受け容れたり読んだりしたことはないが、しかし本性そのものからつかみ取り、汲み取り、拵え上げたのだし、我々はこれがために修練を積んだのでなくてこれがために作られているのであり、教えられたのでなくて身に染みついているのであるが—それはすなわち、もし我々の生命が何かの待ち伏せに、追い剥ぎなり対立する者なり暴力に、また武器に出くわしたなら、身の安全を確保するためにどんな手だてを用いようと、それはすべて真っ当なものだということだ <sup>(10)</sup>。

non scripta, sed nata lex あるいは ex natura ipsa など、あえて学ぶ必要も教えられる必要もなく、生まれつき自然本性に植えつけられ染みついた自然法についてキケローは述べているが、メランヒトンもこうしたキケローの見方を受け継いでいる。

さて、こうして『弁証法の問題』は、類 (genus)、種 (species)、種差 (differentia)、特性 (proprium)、

偶性 (accidens) といった属性の説明から、実体 (substantia) など 10 にわたる範疇など、さらに枝分かれした細部の説明へと進んでいく。これらはいずれも正しく秩序に従って明確に教える、あるいは学ぶのに必要不可欠な規則であるが、メランヒトンがここで実例としてあげているものの中には、倫理学や自然学そして教育に関係するものなど多岐にわたっているので、とりわけ教育に関連するテキストに後で触れてみたい。

## 2 節 学問における確実性の根拠について

第 4 部では学問における確実性の根拠とは何か (Quae sunt causae certitudinis in doctrinis?) と問われているが、これは 1540 年の *Commentarius de anima* および、その完成版ともいえる 1553 年の *Liber de anima* 『魂についての書』(靈魂論) とも重複している<sup>(11)</sup>。

哲学やすべての学芸において、そのなかでは人間の素質としての光が自ら判断するのであるが、確実性の規範 (基準) には三つある。すなわち普遍的経験, 原理, つまり私たちと共に生まれついている (生まれつきの) 知識, そして論理的帰結を判断するなかでの秩序の理解である。これら三つをストア派は学殖豊かに結合し、学問の根拠と名づけたのであった。

In Philosophia et omnibus artibus, de quibus lux humani ingentii per sese iudicat, tres sunt normae certitudinis : Experientia universalis, Principia, id est, notitiae nobiscum nascentes, et ordinis Intellectus in iudicanda consequentia. Haec tria Stoici erudite contexuerunt, et nominarunt κριτήρια doctrinarum<sup>(12)</sup>.

大きく経験 (experientia), 原理 (principia), 理解 (intellectus) を根拠として人間は判断を下すのであるが、それは人間のももとの素質、すなわち自然本性にある資質と能力としての「光」(lux) による。これがまさに「自然の光」である。

健常者であれば誰でもが普通に体験するであろう感覚的経験をベースとして、原理と理解は「自然の光」に基づいている。

目のなかの光が体を区別するためにつくられているように, 精神のなかにもある光が同じく (いわば) これらの知識なのであり、それによって私たちは数, 秩序, 比例, 形を理解し, 構成し, このような最初の大前提を判断するのである。

ut lumen in oculis conditum est ad cernenda corpora, sic in mente quasi lumen sunt hae notitiae, quibus intelligimus numeros, ordinem, proportiones, figuras, et conteximus ac iudicamus has primas propositiones<sup>(13)</sup>.

目という身体に据えられた光は体という感覚的な物体を識別するためにあるが、同じく精神にも光が据え置かれている。それは生まれつきの知識であり、これは数などと共に、人間のさまざまな論理的かつ知的な活動を可能にする。こうして全体はいかなる部分よりも大であるとか、原因はその作用に先立つことはないとかいった「当たり前」のことが認識できたり判断できたりすることが可能となるのである。また 1547 年版では、次のように記されている。

こうした秩序や構成を理解することが、自然の光なのである。なぜなら構成することなくして、単一の知識は役に立たないからである。

Huius ordinis & compositionis intellectus, naturale lumen est. Nam sine compositione, notitia simplicium inutilis esset<sup>(14)</sup>.

ここでは「自然の光」(naturale lumen)とは秩序や構成、すなわち三段論法を理解する力(資質・能力)であり、「自然によって知られる」(natura notum esse),つまり「自然の光によって区別される」(naturali luce cerni)等と表記されている。そしてこの力によって、自ずと次のようなことが三段論法的に、自然に了解されるという。

1 リブラ蜜蝋は1ドラクマに価する。

ここに10リブラの蜜蝋がある。

ゆえに10ドラクマが値段となるだろう。

Una libra cerae valet drachma una,

Hic sunt librae decem,

Ergo decem drachmae erunt precium<sup>(15)</sup>.

よって「いつものように三段論法における秩序は自然から知られると言われる」(usitate dicitur et ordinem in syllogisimis natura notum esse)<sup>(16)</sup>のである。

さて、このような「自然の光」を拠り所としながら、なおかつこの光を衰えさせたり、ましてや絶やしたりすることなく、むしろこの光をさらにより明るく輝くものにしていくことがメランヒトンの教育の究極的課題であることも、自ずと容易に推測されるであろう。

### 3節 人間の質(状態)の改善、すなわち教育について

『弁証法の問題』ではメランヒトン自身が明断な言葉を用いて、いわばさまざまな概念定義の実例を伴った見事な分類を示してくれているが<sup>(17)</sup>、教育についても同様である。範疇(*praedicamentum*)いわゆるカテゴリーと呼ばれるものにはアリストテレス以来10のものが数えられるが、そのなかに状態もしくは質(*qualitas*)がある。とくに人間の質について見れば、その改善に取り組むのが教育である。これを各人が有する習慣(*habitus*)の改善もしくは改良としてメランヒトンは論じている。それでは *Quid est Habitus?* 習慣とは何か。

習慣,ギリシア語ではヘクシス,これは人間の中で頻繁な(繰り返しによる)行為から獲得される質(状態)である。これによって人間は適切かつ容易に、自身の習慣から制御され援助された行為をなしとげることができる。たとえば、画家ルーカスには描くという芸術が習慣であるが、ルーカスは描くことを学んだ。その後その手は習慣づけられ、より簡単にかつ確実にその線を描くようになり、その精神は他の未熟な(訓練されていない自然のままの)者たちが描くよりも熟考して描くことを促す。

Habitus, Graece ἕξις, est qualitas comparata ex crebris actionibus in hominibus, qua recte et facile homines efficere illas actiones possunt, quae a suo habitu gubernantur et iuvantur, ut, in Luca picture ars pingendi est habitus, didicit pingere Lucas, et postquam manus assuefacta est, facilius et certius pingit eas lineas, quas mens intuetur et pingere iubet, quam alii rudes pingerent<sup>(18)</sup>.

ここで例としてあげられているルーカスとは、メランヒトンやルターの肖像画を描いた同時代の有名な画家クラナッハ(Lucas Cranach der Ältere, 1472-1553)を指している。繰り返し行われる行為によって人間のなかに獲得されてしまう状態や質が習慣、すなわちハビトゥスあるいはヘクシスである。

しかしここでいう習慣とはあくまでも人間における習慣であり、動物における習性とは異なる価値志向性をもっている。習慣はあくまでも理性的な自然すなわち人間において生じるとメランヒトンは言う。「な

ぜなら理性的な自然だけが習慣づけられ（訓練され）得るから」（*quia tantum rationalis natura assuefieri potest*）<sup>(19)</sup>である。しかもこの理性的な自然である人間は、神によって次のような目的のためにつくられているとメランヒトンは言う。

神は理性的な自然（人間）をただ次のためにつくったということ以外に原因が求められはならない。神は人間が教えをつかめる（教えられる）こと、徳に向けて変えられることを欲している。というのも、この二つの善い目的のために神はとくに人間をつくったからである。神についての教えと他の善き事柄を学ぶことであり、徳へと向きが変えられることである。

*Nec alia causa quaerenda est, nisi quia Deus naturam rationalem condidit talem, vult eam doctrinae capacem esse, et eam posse ad virtutem flecti. Nam ad haec duo bona praecipua eam condidit, ut discat doctrinam de Deo et aliis rebus bonis, et ut flectatur ad virtutem* <sup>(20)</sup> .

要するに、メランヒトンは理性的な自然である人間が教育可能性をもって、これが徳に向けて訓練されて習慣づけられると述べていて、教育の可能性とこれに対する課題と期待を明確にしている。あとはこれをいかに完全なものに近づけていけるかである。

そこで *Quomodo fit perfectus habitus?* どのように完全なる習慣は生じるのか。それは生来の力 (*potentia*) と習慣 (*habitus*) による、とメランヒトンは言う。むろん習慣づけや教育の可能性を認めながらもメランヒトンは、古典古代からの伝統に従い、個々の人間がもつ生来的かつ本性的なポテンチア、あるいは「素質」 (*ingenium*) の存在を忘れてはいない。さらには学芸や徳へと向かおうとする「自然の衝動」 (*naturales impetus*) が必要であり、それによって「駆り立てられた熱意と教え（教育や訓練）により」 (*excitatis studio et doctrina*)、その人の状態や質はより完全なものへと近づいていくとされる。先のクラナッハと同じくメランヒトンは当時の有名な作曲家ジョスカン・デ・プレ (*Josquin des Prez*, 1440/55-1521) を引き合いにだす。まず彼には生まれつきの資質や能力、つまりポテンチアと素質があり、だからこそ音楽への自然の衝動によって駆り立てられ、そして熱心な学び、すなわち努力によって芸を習得して今の音楽家としての状態がある。ここでメランヒトンはとくに「自然の衝動」がなければ、いかなる潜在的な力も素質も花開くことはなく、完全なる状態も生じ得ないと述べている。

それに対して、自然の衝動が欠けている場合、たとえどれだけそうした素質が習慣づけられ（訓練され）得るにしても、それでも不完全な状態が生じる。

*Econtra, ubi desunt naturales impetus, etsi utcunque assuefieri talia ingentia possunt, tamen habitus imperfecti fiunt* <sup>(21)</sup> .

さらにメランヒトンはホラティウスから引用して、当時の詩人コエリロス <sup>(22)</sup> を例としてあげる。そこでホラティウスの有名な言葉が引かれる。

ミネルウァの意に反してまで物をいい、身を処することは出来ません <sup>(23)</sup>。

*Tum nihil invita dices faciesve Minerva* <sup>(24)</sup> .

「ミネルウァの意に反して」とは「天賦の才なくして」という意味であり <sup>(25)</sup>、生来もしくは天来の才能や素質の存在も前提条件としては大きい。

ちなみにメランヒトンが引用する『詩論』のなかでホラティウス自身もメランヒトンと同じく一より正確にはメランヒトンはこうしたホラティウスという古典から学んだのだが一素質と自然の衝動や訓練としての習慣づけや熱心な努力などの関係について、こう記している。

賞讃すべきある歌が、天賦の才によるものか、それとも技巧によるのかは、よく問題になりますが、私としては十分な才能なしに努めても、努力を欠いた才能も、どちらも役にたたないと考えざるを得ないのです。努力と才は、お互いに相手の助力を必要とし、共々仲よく結ばれるのです。競技の際に到達するゴールをめざして懸命に走る男は、その前に、子供の時からいろいろと我慢し、努力し、汗を流し、寒さに耐えて、色事や酒を慎んできています。ピュティアの競技で笛を吹く者も最初は師について、こわごわ笛を習ったのです<sup>(26)</sup>。

いつの時代や社会においても変わることのない教育上の教訓であり知恵であるが、古代ローマ時代のホラティウスでさえ、巷に自惚れ屋があふれていることを嘆くのは興味深い。だが自惚れや傲慢は、いつの時代や社会にも変わらない「罪人」としての人間の状態なのかもしれない。

さてメランヒトンにおいて極めて特徴的なのは、こうした素質や衝動の由来についての次の説明である。

ところで素質の相違はどこからくるのか、自然の衝動の相違はどこからくるのか、私たちは自然学のなかで探究しなければならない。

Unde sit autem ingeniorum dissimilitudo, et unde sint diversi in natura impetus, inquirendum est in Physicis<sup>(27)</sup> .

各自が生来的かつ本性的にもつ素質や衝動については自然学、つまり今日では自然科学や医学の領域に属するとメランヒトンは述べる。が、メランヒトンの自然学についてはテーマを改めて取り上げなければならない。ここでは最後に、状態や質としての習慣の分類についてだけ確認しておこう。

習慣には身体のもの、魂のものとの二つがある(Sunt igitur alii habitus corporis, alii animae)<sup>(28)</sup>。さらに魂のものは二つある。知性の習慣と意志の習慣である(Alii sunt habitus intellectus, alii voluntalis)<sup>(29)</sup>。ここで再び学芸と徳が問題となる。とくに知性的習慣もしくは知性の状態や質の様式が知識と呼ばれる(Genus autem habituum intellectus vocatur Noticia)<sup>(30)</sup>。興味深いのは1560年版において、この後のセクションに、メランヒトンの娘婿であり自然学者でもあり医者でもあったポイツァー(Casper Peucer, 1525-1602)の医学的説明が付加されている点である。ポイツァーは、先にメランヒトンが自然学のなかで探究されなければならないと述べたことを踏襲し説明を加えているが、やはりこれについても稿を改めることにしよう。

おわりに

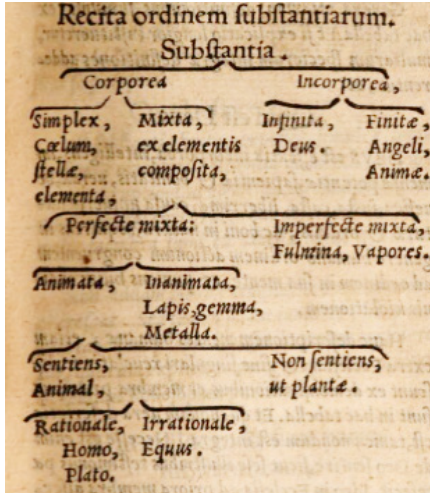
『弁証法の問題』における「自然の光」について見ると同時に、そのなかで実例としてあげられている豊富な内容から、とくに教育に関係する、人間の状態あるいは質としての習慣についても明らかにした。ただしこれはまだ全体のほんの一部であり、メランヒトンは理性的な自然である人間がやはり生来的に有する愛情や養育のことなど、教育に関して興味深い説明をこのなかで多く記しているが、これも稿を改めて明らかにしてゆきたい。メランヒトンにおける教育と学習の根本原理の中心には「自然の光」があり、また原理に関する知識もまた、人間に生まれついてある精神の光によって認識する(Noticia principiorum est, agnoscere principia luce mentis nobiscum nata)<sup>(31)</sup>と述べるメランヒトン。その具体的なプロセスやプログラムがどのように組み立てられてきたのかについては、拙著を参照されたい<sup>(32)</sup>。

注

(1) あたかもコンピューターのOSのようなものともいえよう。拙著『メランヒトンの人間学と教育思想—研究と翻訳—』2018年、成文堂、10頁以下、67頁以下、とくに73-4頁、参照。

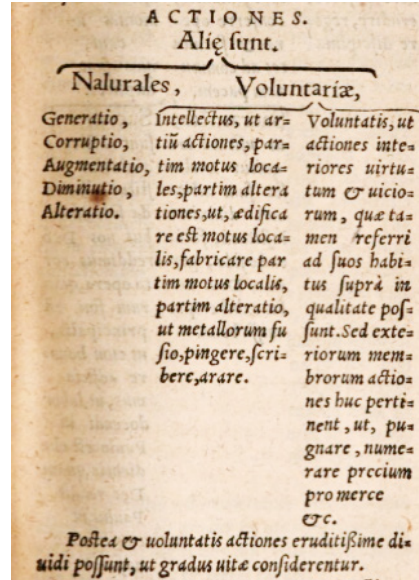
- (2) 同前書, 18 頁以下, 参照。
- (3) Cf. Frank, Günter (Hrsg.) : Philipp Melanchthon. Der Reformator zwischen Glauben und Wissen. Ein Handbuch. Berlin 2017. S.515. Leonhardt, Jürgen (Hrsg.) : Melanchthon und das Lehrbuch des 16. Jahrhunderts. Rostock 1997. S.125.
- (4) Leonhardt, op.cit., S.125.
- (5) Philip Melanchthon : The Dialectical Questions. Erotemata Dialectices. Translation and Introduction by Jeanne Fahnestock. London 2021.
- (6) CR13, 513. 以下, 下線はすべて引用者による。
- (7) CR13, 513.
- (8) CR13, 514.
- (9) CR13, 514.
- (10) 『キケロー選集 2』岩波書店, 2000 年, 350 頁。
- (11) 拙著前掲, 359-362 頁, 参照。
- (12) CR13, 647.
- (13) CR13, 647.
- (14) ゲットインゲン大学のデジタルライブラリーより。[Ertemata Dialectices, continentia fere integram artem ita scripta, ut iuventuti utiliter proponi possit - GDZ \(uni-goettingen.de\)](https://www.uni-goettingen.de) 2023 年 8 月 27 日閲覧。
- (15) CR13, 649.
- (16) CR13, 649.
- (17) 付録の資料を参照されたい。
- (18) CR13, 535.
- (19) CR13, 535
- (20) CR13, 535.
- (21) CR13, 536.
- (22) 『ローマ文学集 (世界文学大系 67)』筑摩書房, 1966 年, 210 頁。
- (23) 同前。
- (24) CR13, 536
- (25) 前掲『ローマ文学集 (世界文学大系 67)』, 214 頁。
- (26) 同前書, 210-211 頁。
- (27) CR13, 536.
- (28) CR13, 536.
- (29) CR13, 536.
- (30) CR13, 536.
- (31) CR13, 536.
- (32) 拙著前掲等, 参照。

付録



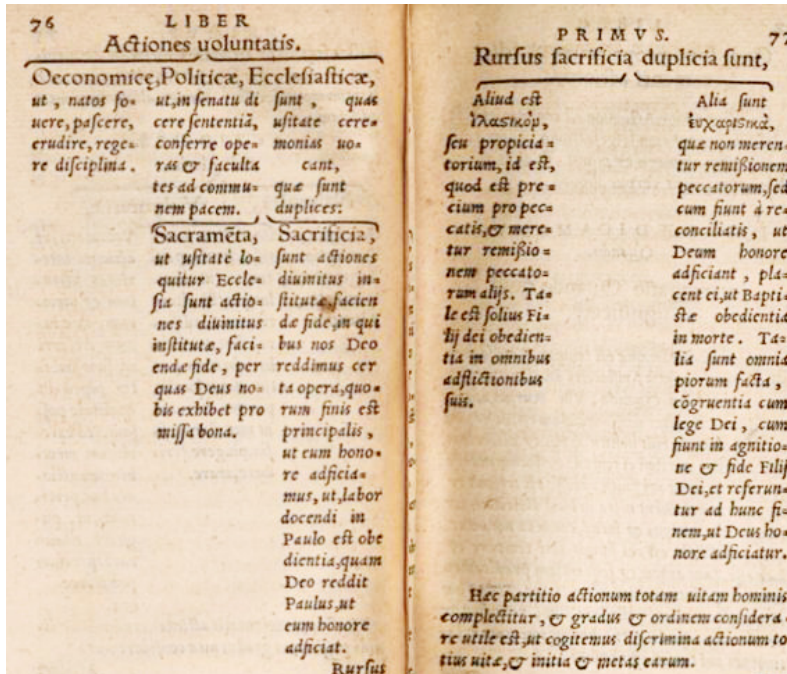
資料1 実体の分類

バイエルン州立図書館のデジタルライブラリーより。  
<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10993728?page=46,47> 2023年8月28日閲覧。



資料2 行為の分類

バイエルン州立図書館のデジタルライブラリーより。  
<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10993728?page=92,93> 2023年8月28日閲覧。



資料3 行為の分類(続き)

バイエルン州立図書館のデジタルライブラリーより。  
<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10993728?page=94,95> 2023年8月28日閲覧。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。